

《 考 察 》

◆児童の評価について

「学校や学級が楽しい」「いじめや仲間はずしをせず仲良くする」は、肯定的な評価割合が高い。学級経営や異学年班活動などを通して、児童相互の人間関係が構築できていると言える。また、「学校行事は楽しい」が全学年で8割の高評価となっている。しかし、「読書の習慣の有無」は、ほぼ半数ずつに分かれ、「勉強はわかりやすい」「家庭学習をがんばっている」は、学年が上がるにつれ評価が低下している。学年が上がるにつれて評価が低下していく傾向が、全質問項目に共通している。この原因として、自己評価で厳しい見方をしていることや、成長とともに学習や人間関係のつまづきを自覚すること、さらには自己肯定感が十分に育てられていないことが考えられる。

学校全体で推進しているポジティブ行動支援が、有効に機能しているかどうかを検証し直す必要がある。また、児童の主体的・対話的で深い学びの実現のための授業内容や児童との関わり方への積極的な改善の取り組みが急務であると考ええる。

◆保護者の評価について

20の質問項目のうち半数が70%を超えており、概ね学校の教育活動に理解を示していることがわかる。課題は、「読書力の低下」・「インターネットやゲームの使い方」が挙げられる。「家庭でよく読書をしている」と回答した割合は、全質問の中でも低評価の32%であり、読書習慣は年々低下してきている。また、家庭学習の習慣が十分に身につけていないことがうかがえる家庭が4割近くにも及ぶことことから、学びに向かう力の伸びを懸念する。スマホを所有する児童が増え、SNSやオンラインゲームなどの利用との関わりにおいても課題は大きい。

成長期における時間管理の重要性を共通認識とし、学びの基盤づくりを確実にしていく必要がある。読書の習慣化のためには、「おすすめの本」を紹介するなど、家庭で活用できる教育的な情報発信を積極的に行うようにする。また、「家庭教育の手引き」の見直しを図り、定期的に取り組みの現状を把握するなど手立てを講じたい。

◆教職員の評価について

教職員にとっては、『GIGAスクール構想』によるタブレット活用の授業づくりのために多くの時間を費やした。そのためか、「自主学習の推進と定着に努めている」「読書活動の推進に努めている」の割合が6割を切っており、保護者の評価結果と重なっている。また、「授業改善への取り組み」が十分ではないと回答した割合も高い。児童が主体となった新しい学習形態への転換を目標とする教員の意識が高いため、自己評価が厳しくなったことも理由に挙げられる。そして、働き方改革に関して、「自ら勤務時間の削減に取り組んでいる」教職員は、ほぼ半数という状況である。

教育専門職として、常に授業方法や内容の再考を行い、PDCAサイクルを機能させながら授業に臨めるようにしたい。また、多忙の中でも行事予定を見通した前広い計画と準備をしたり、作業内容の取捨選択を工夫する等により、個々の時間管理能力を高めることも重要だと考える。

アンケート結果全体を通して

今年度は5択回答で評価が分散した。しかし、「どちらとも言えない」に回答している理由や背景を予想し、改善策を考える良い機会になった。全体としては、学校運営に対して肯定的な評価を頂いている。しかし、児童の回答に関して、学年が上がるとともに自己評価が低下する傾向は、教育活動の大きな課題であると実感している。日頃から、児童の考えや意見を十分に汲み取り、主体性を尊重した教育活動ができてきたかを振り返り、改善策が児童の姿として具現化するよう取り組まなければならない。その実現のためには、働き方改革の目的である、教員がじっくりと児童の心の声に寄り添うことができる時間的確保を保障することが重要である。教育課程や年間行事等の整理精選や事務作業の環境整備等を、さらに改善を図るようにする。

今後、学校・家庭・地域の三者がこれらの共通認識のもとに、連携を強化し、児童の真の自立に向けて協働して取り組んでいきたい。